

第111回 令和7年10月27日（月）

批判について。

プロ野球が好きな人はみんな評論家になりがちです。「どうしてあそこで続投させたんだよ。絶対リリーフにチェンジすべきだろう！」「ほんとにあの監督の采配はダメだな」などなど話は尽きません。これは好きな人が楽しむ、ストレス解消として悪くないことだと思います。

でもプロではない人に対して終わったことを責めることはどうなのでしょう。「どうして〇〇しておかなかったんだ。」その失敗がおきることが事前に分かっていたら誰しも必ず準備するはずです。だいたい失敗した本人がもっとも傷ついているはずなので「次はこうならないようにしよう」と未来型のアドバイスを与えるべきだと思います。そうしないと失敗を恐れて新しいことにチャレンジしなくなります。

ポイントをすり替えたり、過去のことで結果が出ていることを批判したり、本質ではなく手続き論で責めたりする人がいます。当然そこには正論が多く含まれているので理にかなっていることもあります。しかし批判のための批判に陥っていることが結構あります。

相手を論破することで自己満足をしている人がいます。一つの事柄には複数のやり方や視点がありますから並行して交わらないことも多いです、どちらが正しいと言えない場合もあります。正しいかどうかは結果を見ればわかりますから、事後の批判をすることは間違いがなく、正論であることが多くなります。

歴史はそこから学びを深める学問です。なぜ明治維新で徳川が賊軍になってしまったのか。薩摩や長州に敗れた理由を探ることは大切ですが、負けた陣営を安易に批判するべきではありません。当時は負けると思って戦っていたはずではないのです。負けたほうにも国を良くしようという気概はあったはずです。

議論をして相手が少しでも言いよどんだり、黙ったりすると論破したと喜ぶ風潮があります。少年漫画でもよくしゃべるほうが負けるのはお約束ですね。だいたい冷静に場を見極めている人は口数が少ないものです。

1億総評論家時代になって、何かあるとネットの書き込みがたくさん増えます。すべて結果が分かっているからの批判です。事後の反省の参考にはなりますが、それで相手をたたくことはどうなのでしょう。

失敗であっても結果を恐れず行動した勇気は、何もせず後から批判することよりも立派だと思います。